

急性弛緩性麻痺、急性脳炎・脳症に関する臨床疫学研究
研究分担者 細矢光亮 福島県立医科大学小児科 主任教授

研究要旨

福島県全域における急性弛緩性麻痺および急性脳炎・脳症の発生を前方視的に調査した。

急性弛緩性麻痺は、平成 26～28 年の期間に福島県での発生はなかった。急性脳炎・脳症は、平成 26 年に 12 例、平成 27 年に 13 例、平成 28 年に 8 例の発生があった。

検討しえた範囲において、エンテロウイルスが関与したと思われる急性弛緩性麻痺および急性脳炎・脳症例は認めなかった。

A．研究目的

福島県全域における急性弛緩性麻痺および急性脳炎・脳症の発生を前方視的に調査する。

B．研究方法

福島県内の小児入院施設を有する全医療機関の協力を得て、平成26年1月から、入院を要する重症感染症等の全例について、前方視的発生動向調査を行っている。その対象疾患に、脳炎・脳症、細菌性および無菌性髄膜炎、熱性けいれん重積、胃腸炎関連けいれん、急性散在性脳脊髄炎、多発性硬化症、ギランバレー症候群、急性弛緩性麻痺を加え、福島県全域における急性弛緩性麻痺および急性脳炎・脳症等の発生を調査する。

（倫理面への配慮）

福島県立医科大学倫理委員会の承認を得て行っている。主治医からの報告は、発症日、年齢、性、病因・病態のみであり、これにより個人が特定されることはなく、不利益を被ることもない。

C．研究結果

急性弛緩性麻痺は、平成 26～28 年の期間に福島県での発生はなかった。

急性脳炎・脳症は、平成 26 年に 12 例、平成 27 年に 13 例、平成 28 年に 8 例の発生があった。病因は、ヒトヘルペスウイルス 6 型が 9 例、インフルエンザウイルスが 4 例、ムンプスウイルスが 1 例、不明が 19 例であった。病態は、二相性脳症が 9 例で、そのうちの 3 例がヒトヘルペスウイルス 6 型であった。検討しえた範囲において、エンテロウイルスが関与したと思われる急性脳炎・脳症例は認めなかった。

D．考察

急性脳症は、福島県において年間10例前後の発症がある。原因としてはヒトヘルペスウイルス6型とインフルエンザが多いので、1歳前後の乳幼児における発症と、インフルエンザの流行する冬季の発症には注意が必要である。

平成28年度は福島県内におけるエンテロウイルスD68の流行はなく、これによる急性脳症や急性弛緩性脊髄炎の発症はなかった。

E．結論

最近ではエンテロウイルスD68の流行はなく、これによる神経合併症をきたした症例はないが、今後のエンテロウイルスD68の流行に注意する必要がある。

F．研究発表

1. 論文発表
なし
2. 学会発表
なし

G．知的財産権の出願・登録状況

- （予定を含む。）
1. 特許取得
なし
 2. 実用新案登録
なし
 3. その他
なし